

天正記



天心祀書第一目錄



一 甲信治進發 再武田一をくめ川をうれり

一 秀吉西國内をうかうれり

一 秀吉よりむねんれり

一 付信長父子御自らのり

一 松田平次おの孫れ侍事

一 織田七普来志やうのいれ又

一 倭中へ雲霧機乃り

一 秀吉上洛山を記合戦の事

一 明和編年次引乃を安志山ふこもり

一 坂がりて自らのり

一 秀吉の尾列をんを天下定めれり



一 侍者公卿をう礼ついでんのもろ

侍者公卿をう礼ついでんのもろ

侍者公卿をう礼ついでんのもろ

侍者公卿をう礼ついでんのもろ

侍者公卿をう礼ついでんのもろ

侍者公卿をう礼ついでんのもろ

侍者公卿をう礼ついでんのもろ

侍者公卿をう礼ついでんのもろ

侍者公卿をう礼ついでんのもろ

侍者公卿をう礼ついでんのもろ

侍者公卿をう礼ついでんのもろ

侍者公卿をう礼ついでんのもろ

う建つてくさる乃為のすいとくそんすうろ  
 菊山乃まむわけふ風之れとらんし東礼乃わが  
 の月を魚川にのきあまはくすせんさいのねも  
 ふきん乃あやうきんはぬれんも百代に衆もわお  
 くらせうのうきいなうらんやきん義こてうれ義  
 なふとりよろこひなふとありかーまんや家よ  
 右大お平の物長信長と天下よとつうりし國家  
 入りきんといー年一久ーやまこひ別安去山ふ  
 おつしきやうくんのをかま人大石取のつて山を  
 修くと東おれりか南水のとひ倉人しし町く  
 天上れやうけうなりまろうのん志やうきお水  
 のなととくやのうれりの人志ようせいのい

りかそへさるのこ  
上皇皇さくちよくとまはりけいんく  
のうおたいしし百くせんたよあう登子けりり  
るりきうちうれしやうきつとつよアし今これ  
うしよめてにくせんれいもわ徳國の志ゆ人あふ  
志ゆきすやりふ老なり或ハ百まいれうとあふ  
免山歸してりるものあういとなりあふ時ハ子万  
縁るけいっやくよれおいうるものちよとなりお  
まは法國せいひ乃はかりこととよやふのせい  
を張りとむタアもさすいらやうこうけいふ三子  
人のてうのひとまきりおはのゆふえん日この徳  
ゆこの志見あまはありりの利山まうの急いこへ

まやうらうてんのうくゆふじちろこれよ色つが  
わあくまういのちんきん武田田良勝よりとり  
老年一末のてう款くゆへり秋田城女平船長  
のふちく信別まつこむるさそきまの城ととり  
まはうつとを令申うなみ藤森小山田俊中守  
おはれ此とまもはまりは合入りえ川ちりも兵衛  
射調もやくともつてうくよせめとすをあと  
こしきうりもさしそれとひともつて甲列ひ濃  
田中一入へれうつと一裁よ及もひといやく  
して大目山入りかくれぬふたぐえんさい川志  
し兵衛射遊のたを太夫入やなうへをりけりお  
ケ療うつちん入り及ふけたりけりも同らやく





ちさうつて大本のこす人よとてみつてさ成なる  
魚かきスーラうふとやうくさくさくさくさのう  
の包れつこく一珠一珠のうり乃たりあり海  
うよのうり一足りもつてれとふれなうさ又  
初る人教頭とい一兼りれ又町十町乃るひと  
たてくう一乃川め乃うなへとまもりとるれ取  
より右馬歌くそんらやこもひ川九巻のれす  
りの吉川すうりのうもえむ枝さう雲の旗とく  
よよますすびいあさるううすひの中一おとてふ  
成つてししね成りうとつたひ子成さ一そ國十  
のあくの人数八百りれりしを川一を備中一たり  
山一やうくさのけくふふとうよひと陣取相十

町一もへううすうれる大河あるゆるとさ  
ひこそきくおおく心事とぬす教目と成る  
さうまよひくう一のうけめ此人とゆり  
まりりくおひを川を懸さるうとつちも西國  
一つんよとよとすつたのひひ清まよ海軍乃起  
河下知とらうくささゆくう川一乃合戦成る  
るうりさる乃ひひ清らもあつて播久太  
良池田勝九席中一川瀬無兼と山右衛門合を勝  
一兼りれつあ下さるお軍を信忠をのひく一ま  
部心垂てこくそん座ありつとてこれとる日向  
寺光秀軍とてあうくちやく陣中一先ひ  
り一ふ力とつてすアしうせん乃わうふよつて

わがてふ所立のしひのらん進りりあまたう二万よ  
きの人志ゆとそろく倭中しあきらさうひしとひ  
そうすし無事となくびるすけう治しふ決すなり  
さそふ月坊八日ありあ山よのかり一きのまんち  
ふとけひて發句云

時為今あ絶あきこり五月のれ

今ハくはくふびりんれしんりされひとり  
うてあま強こくくんとわたり夫正十幸  
六月一日れ報年しん見けひて二万よの人志ゆ  
とれんたんものくふ飛山河くさう回乗あれ洞  
わんかんりあししりひあれ治あよとよする軍  
あ的事ゆありも志治しりさきすうひよまのふ

あふらくとらうつあつあもさこりあ幾のひ村井  
入をきん志ゆのふ世以下りりてれまて治まん  
らん乃くくんとくへ志んうう及乃る修忠  
やとまらひりやううくされやうくへり包を  
入治ふ志やうくじらんあは入まん志ゆれ流と  
りあありえんおふ乃あすまきんまてまくり  
このりくめるり探ふ世れ中ハ羞のうらよわ  
と口はこれらうもあ知海平政同勝長あむりく  
次あ同縁すあさい有内茲れすけそ外治事回  
り人教と互けたりすれ治志よの回方使りりを  
あこのあふりうつあきとひああがら門あさま  
や少り一あふりうつとみれ入將軍治うんれけ



くろくしうはは天下せいひ川の系は利んもなりく  
國の乃結侍或豊あぬの出るる或も東國のあふふ  
としてひひとの大しやうとむさ織田三十七信高を  
空國よりつこつてとつひあふふしてう裁くして  
これうあふふは津の射らちやううさのちをそへ  
つうあふふのこれ津よりこまを研しうれ初り  
法侍といあく津の産ぬととようつやとしあ在國  
きしむきまんのいさふまやうやまなく子法侍  
の人とい活中へ入るしおぢうし思ひくこれ  
ゆふう小侍あふふやうやく小姓百人色に  
お軍扱うられ由預れゆうさまなふ老やうんと  
ゆふふこれうじやんのゆうし上預られたとい

ておんをやうすられつこれたあししなふふあふ  
ととやうあふおのゆつすらるる定まればゆらや  
今さうなんをやうろくつあやうととらひろあふ  
おゆうつしむふ兵又六人のゆきてはお十とんと  
乃うふとて款をものりたし門くんい色とい  
地りし教ヶ取はまのしやうゆりゆ産ぬうして引  
入たすふりしゆららん高橋虎雲大治の一糸  
うくさうらふる小ハおゆうもとしなれす面一  
あふふり合ふ字と名あうらつし一うくもさうと  
まらうとをなう魚うら宛すゆくつくすくじんを  
中ノ尾源太らう又ん良ゆあさ甚あふたり勝すの  
し里の足あのかつしとの七八十人思ひくう

とさら夫一乃んふせられたくつふとつるをたせし  
小妻はてられししくをうらりしを將軍まの  
氣たふ秋乃月もさりてあうひゆふゆ代あしく  
くさしうらしひゆせのくまのり、火をうけ  
清孫のうれをもん村井入るる也しん長川外  
家ありゆたふ乃ふんとうすうとアはしめはけん  
とふとむぬのきころあをすけし里つくとこれと  
みんと平川をこれたう人数二弟鎧袴うこみ同く  
りけ入つたしゆけりいをけくすしつへたうれを  
そして信忠ゆらんふよめうりくちへしを素平  
とあんと下信忠をせひなのふち想つけりつとを  
ともしよととふはくきりしんれあふ敵軍まこ

らん所のうこ見てんらく乃のこよあつてんを  
けう海とらしこまこしるらんしやふこ乃  
かけあのまりあり然れぬめうりくちをあさう  
き陣とりをりをせんつたひこおのけふれつた  
ふらあふゆたつねまの進そとゆんちやうりん  
つしこまつてぬま前もあんなまう乃侍産二束乃海  
志よとらゆつたふしを上げまうり二てうのゆ  
取へ衆肉尸可く志ま月くも  
とう文張もは車うしや内裏をうししなり信忠  
且ゆつしふ六面はあり二てうのゆ取へ入ふ  
ぬ軍山馬まつりあれたうりるさくられやう  
屋う二てうのゆたふしくりつたその一子まは

西におよこれのくをせしやてい坂磯田十段  
ひら井志ゆんちやう少三人と平八丁の左九  
巻の福とそ平丸巻の松子兵隊下石丸巻の丸く  
ひら三平赤さし七らり来りんさいとう新又津  
田丸巻次らう森新女とんの侍三くハけい志巻楼  
本らん七おさしよ吉山口こつんとら田善太徳門  
あのがあまきましくこの徳侍のひまりこれたう  
奇来み張まらうくくあまきまらう也 將軍入り張  
腹の巻法らんちやう史聖なる二条此法承へたて  
こらりたまふりーとたぐいふたまをけくさ二てう  
れ浄志よへ押よせりうぬおよまらり張ん即くあ  
のまへ大ての門とひらふとまらていさうとたて

うらまをくんひやう思ひくのることりらおな  
張志の巻つこつらりつこものまもたもてまめ  
まらり入あまをゆきてつこらうまらりあ  
とらきんくおらふとくこららりけきこら  
とらけいひとこまあくふまふこらりあ敵や  
六巻張志めびく巻あつてまらり巻くせめあ  
とら尺びくまきんこまびくもら一巻しあうお  
つさびとりん巻あやうまた力やうらまのやい  
とそらんせめつらとあくま又十人即こらま  
百巻人張りまらな小洞なされ張りまきささめさ  
れぬまららあまあま百人けらまをそくとま信  
束一巻よまらてまおもてままらひけらまの十七

八人きりふせゆふ清くこののくも道をたたらしや  
ひもり成りししおとらふ四本へさつたての  
地らに其町の知縁十旅放生に志りん候りや  
次を非亮亮乃つし物百人くらりまふれりつひく  
まらてくく此のふたはくは流しあまん中なり  
まらて入る力のあまのひやうやうれひこんの  
志の川もくやう一太刀れれく後後けくしあは  
てまより縁十旅三津の首らやうやうち頭とた  
まふはをん志ゆれをしく刀のくまらりあひ  
うら魚せ先入款乃人数何まらつてしあひ  
合我むくくしやうらんれは供中し懸ささし  
ゆてんの口方なり火とつりぬふくくさまらん中

ふとえを家くくろよのふたく一藪は伊何し十又  
字小田のくうれあひあひ共思ひくふもさき  
一なすけしりとりん 御軍治平四年四月十九信  
忠治通の六つさけくしれむしれせんらん  
らんふつさうてみあつりうのなんれとたの  
志りく又志やう別乃任人松田平女うつたくを  
アんとふりあうられりし志とさくくを志ふ  
旭すし所ふのいまおそく志やうくん治けくめ  
さゆくあひさらふ及ふゆめうきんちよくし  
入流いほく志くあうくあさゆめあうもふん  
ゆ二志の志りつゆよいしふむとつり又らん  
くまめこをゆすゆん志せりくし志ゆの

さよとくしそ一のうりよ云

うれきしそいふえぬれ方れうふかま

所井よをむりみりれ山風

まよふ云くわの人云ちやくれりんとまう

おれり則以まらんうんとさいちんと

めは書とえりうま王うぬれくり出り危難ある

せいふらうのもたうまやみか人それと受てらん

心い裡成う取やすのこやそれうも落中し志の

うんあなめりりあきり勝無勝成のこー壺そ日

代び戸乃あくよ坂平乃成りりく王安志山よを

ふのりー成きくこの井井最成と始お夫人は主人

水乃くは不終く思ひ人ぬひらう人よひこれ

まやうらそこーをらりくふよけけけ

お軍由いせ乃町ハだくうらうめ入るうくせん

まもるる海門前よ帝成なりゆきんひくまよ

そおひ今さうひうう包てーうを志んとう乃せう

うくたへくもらうのけんそう皇帝乃やうまひら

くわう共らんる志よくをれなんと志のふうれ

まようかうそよせめられおさうのなごことうれ

かすうまおさるいふいとなひやうてこれ

たうのあけらまうりり清てんよ入るうくー

上るまやうくまじのあめをかめくまきん

まらううやう金銀も玉まんーうまやうらう

うくはまやあこくこれとらとなうのもまこと

山へみえん入の列一尊ん。相しつり六月十日坂  
本の機への料を志す。してあまはうのぬたの  
れ傳舟は國をゆこす。名譽兵甲太丈藤高太和八國  
しゆまほく井たゆんけのまやう部の越位をきくめ  
あうく上流あうまふりさふん役れをけり  
つすとりをきこれさうまやくまはひとおくみ  
せす又さうのつれ川を研しけん職田の七  
修さあまたうあふ左兼門を秀しけ由きくく  
おれ七兵集これたうゆることせまき。將軍  
おたのしいしゆりふまわさるゆるりさ  
しとたさのこてもぬららこたき。まうはか  
おりて秀吉のらんてし六月三日秋軍つりらう

ちんあり秀吉是ときくむ中一をさしやうか  
ふまなりとしんたをあらもまなりつこはまつく  
いよらんをさるまよひのわうついらうさく  
といてらんまうせめをわしうの老ひあけく  
おののこれひくろさやうの張らこたふらんよ  
ふまらゆ

あ川れひをばりなりてりらゆまき  
さりさり秀ももくけりまをなら  
まやうはあふもや河若川流ゆあひまは後言書れ  
城大さやう又六人版ときまこたようけあひたすの  
られくまひのわうさんつさ又毛利家よりあん  
まういろくあうさり交國の内飯中へ後ねさう

凡そや石見の上ヌケ國のこゝろにんししを人  
せいの志をそへ人あらとつてこゝろにんししを人  
つて乃りこゝろにんししを人あらとつてこゝろにんししを人  
をんかまうん包よいこゝろにんししを人あらとつてこゝろにんししを人  
志をり家おとつてをうれ孫をまひりそ家とひりお  
つてぬ念よりとりてぬのれもてのちやとやく  
しつて新京のた立成たつす人まをいといとりつ  
てたつたのれ捕り乃三みりさやうだの獲別加  
せいの乃こゆ人三人孫をさささうひやうあれ成た  
てく枚原七さ九おの射らん志とてつてり志ら  
乃うらへらやうふよ人教といまとをさり家とつて  
あんにう案こ入りまう勝ふり國再お人志らせいの

志うひらう志をりあ乃らん成りしを考者あん  
あつてふりせなり六月六日れあつてあつては中  
おもてを引て倭おれ國ぬうの志らうつてこれ  
きて大西大西敷う西の大西あつて水と志乃志志見  
地よはり二十日はりうれ自らやと科と総率  
のひそ流もひやう人志九日と志めち成りうら  
ひれ乃さうひもなく人志れつみともはの志あま  
あつてりういさり秀あちやと孫すれてうつて四  
記傳守これたり又志九志ののせう各あらんして  
しやうりし志もた四なり科とをゆるまう人教天  
神凡馬場山志れりうらとけく志連りうれと足合  
ひてりらやく志んの事すこれたりあぶらう





らんくのみりすりとまらておちじちやよをりて  
の一人もれうふすもとうりせうつうるへよせ人  
救世おハクんよりのこびるだくわい海のこい  
こいこいこいひーくつた乃かうとけい  
たうらのせんひとさるとつるをうかりす今救お  
ちきんこいこいこいなるつたるうんせんやまら  
一たん板本の機よたてこもり志あくがまらアし  
志ゆい板なり一板半けりこいひそかすノ又六人よ  
はま志うせ大なるハらうす田乃あせをけいひやふ  
けいの中とゆくよせてきひるれうつせん  
けいれい乃神と一ぶうこ板まくうとんを際と  
まらり志うつうちる乃ぶこ足板を虎乃おとふむ

あつ味と一せおけ出る板乃肉もをこれたう落れ  
板ふひ、目連ゆきふとくは連しし或し板まらり  
よよせつしせつしひいまりぬきこりおあていふ  
らん討死すまら一板久太良いくさおえてくれ板  
の別とさうりつこいこいこい又安ふ山よをの  
知福卒次ふれたうしい軍乃おもじきとたくとく  
けいの金銀とらりもあくうらんううく一板よ  
やきこいけいこいせんやうまう今もつてき  
おきり一板卒次一板まきとめくうれうりこいせ  
くハクんとしせうらう人かり太清のもぬり  
つそり久太良は山ふのひ一せん一及魁しや  
あつしうく志おおひたてられ云百りり討死と



くもく物みりけ又さと山よたてこもふこれたう  
不命を湯門のせうとたひしあんこうしてをら  
を候ししうきとまとのく尾列滋列すのいり  
つこらふなすは時職田三女信おましれ志ゆり  
ちん勝家といくよぶさうありまよすれ機成也  
系會ゆ一の義ら川まよれゆんくあさくわ  
あま成あうため秋田やうのすけ平の物信信忠  
らやく男天下れ志ゆくとゆさめおこの三女信  
れ尾列たをしくと定の回三七信高と滋列のやり  
たさうこの又羽繁こもさこれさうりけたげ望人  
こして天下のせいだうと成こげひ今悉らうまの  
乃紫るし志ゆとこまふ國とまめたりひよ志ゆつ

あんと吹くめぢりくせりしとらとかりし香  
海國ししとまんじぢんの志ぢといとう内蔵の助  
利光これさうさゆくさうとらとせりてのさ  
のさうらりしとたのこぢくまわらふよ人教と  
けつけりさうめらとまら車子の世猪中をま  
うしこれたうそひともさひるす人あまさくら  
よとりてあ人とまらさうをやうあよ京まら火を  
れまやうのれれ頭まらよ

合我しはあまらまらまらまらまらまらまら  
なこめくこられしち頭まらまらまらまらまら





うす旭也すつくもん志やくをきんしやきんらん  
成つてあきとほくた乃きのかやうらくらんりんふ  
ほうちゆのみか金さんとらりもめハくく乃何し  
らんせの成はくししハらん乃名をさいしきつ  
舞は引あう下流らんかうをもちあてうあくし  
あつらうやうなふくもんをさくの中しは枝れん  
たの勢せうきもうくもふりしそ流中しははくさ  
田川乃まくんちくあやとろとんをゆ百二石の火  
るありやうさやうはくとのさう想まらるるは  
とゆい羽葉か一糸長赤もんの大おとて大城  
さうらとさ又面らんれつひたりあのはは三万のり  
かられさゆふとさゆあしち色ひくやうていんづ

とらそはくをさうまいの場小秀吉ふ國のさたう  
あつらう及りすふさふらひししくくもせ  
あつらう其外見たの老もふらんうんのいし  
ゆあしのおりなり志流田右新これとく後乃志  
志を羽葉に次まれあまかえはふゆくい相とと  
ひし流太刀し赤もれはけりらのふりれゆと國  
ゆきりあゆしおほくくもろの三を録人みれ志  
ほし友衣流らやくしふくしとくしは流中しらく  
外がきん里川ハしう九とう乃僧そくゆきせん第  
やうふりそとちくどうけまれの義を調りん志ん  
さうくふいさやうをふりかの夫いゆりし  
やま一をうのさゆりしひゆりしらん水のり



水田海州中一第

水田海州中一第

水田海州中一第

水田海州中一第

水田海州中一第

水田海州中一第

水田海州中一第

水田海州中一第

水田海州中一第

水田海州中一第

水田海州中一第



110X  
323  
9